

# 私 の 保 育



河 井 祥 子

“私の保育”ここに私が書こうとするものは真に“私の保育”でしかなく、他に通用するものでもないし、読んでいただく価値のあるものでもないと思う。あえて、私の十年の幼稚園生活の区切りとして、その背景になるものから書いてみることにする。

## 私のうけた幼児教育

もう二昔以上も前にこの幼稚園（お茶の水女子大学附属幼稚園）の玄関を、二年間のものではなかった。ほとんど一人ひょうひ

幼稚園生活を終えて出ていった。春の陽がやさしかった。また、帽子をかぶりステッキを持った倉橋惣三先生に、頭を軽くおさえられ、「大きくなつたね」のお声もやさしかった。その声が幼稚園生活のすべてであり、今でも残る最高の贈り物であった。

この二年間の園生活を現在になつて思い出していくことは、そうたやすいことではない。担任の先生が作つてくださつたアルバムが、かすかに記憶を呼び覚ましてくれる。私にとって幼稚園生活はあまり楽しいものではなかつた。ほとんど一人ひょうひ

ようと遊んでいたらしい。今でこそこういいう仕事をして、多くの方々と交わり、お付き合いする機会が多くなり、そうすることに慣れてはきたが、今でも好む方ではない。現在の幼児の姿をみていても、同じようなタイプの幼児を見ることがある。彼等の気持ちがわからないでもないのである。

そんな日々の中で、登園することがられない。担任の先生が作つてくださつたアルバムが、かすかに記憶を呼び覚ましてくれる。私にとって幼稚園生活はあまり楽しい花瓶に生けて下さることであつた。言葉で

表現できないことを、花束に託したのかも  
しれない。

たびたびお弁当を持って大学のグランドへ小遠足をした。その道順は記憶にないが、そこで思いきり遊べたのがうれしかった。

その頃から、運動会、おゆうぎ会のような催物は、人一倍苦手だった。何しろ、最終学校を卒業するまで、とうとう人前で話す、歌う、演することは最大の苦痛となつた。何しろ目立つことがきらいだった。そんな私であるが、何か認めてほしいと思うこともあつた。卒園間近のある日、最も記憶に鮮明な事件が起つたのだ。お帰りの時である。先生は紙芝居をして下さつた。もちろん私たちもこれを静かにみていたのであるが、私はグラグラしてきた歯が気になつて仕方がない。思いもかけず、その歯がぬけてしまつたのである。初めてぬけた歯、ビックリしたと同時に反省もし

た。皆が静かに紙芝居を見ている、いうのに何としたことか……。子ども心に気がとがめ、もじもじしていると、先生は「祥子ちゃんいらっしゃい」と私を皆の前へ立らせた。内心ドキドキである。「祥子ちゃんのこの歯は赤ちゃんの歯で、次に大人の歯が生えてくるんですよ。お家へ帰ってお屋根にあけましようネ」とポケットの中に入れて下さつた。この何でもない事が、私の記憶に残る事件になつたのである。注意されて然りのこと、にもかかわらず、やさしく扱つて下さつたことを感謝するのである。私のようにあまり気持ちを出さない幼児に、先生は気をつかわれたことだろう。

ある日、お手洗いのことで失敗をしたのである。自分ではとても処理できない。しかしはずかしくて先生には話せない。部屋の入口の柱の陰に身をひそめる。先生に気づかれるのははずかしい、が、気がついてもらわなくて困る複雑な心境なのである。何故なら、一度しかない人

生であり、その一部の幼児教育・幼稚園生活なのだから……。

園庭のプラタナスの幹に顔をつけて泣いた時、プラタナスのあの木肌が無気味だった。今でも熱を出すと、その木肌が夢の中によみがえる。

### 私の学んだ幼児教育

『桜草にまがうや若きひとのかげ』当時のお茶の水女子大学附属幼稚園の園長先生であつた坂元彦太郎先生にこのうたをいただき、母校である附属幼稚園教員養成所を後にする。卒業して約十年、若さの失われた自分を省みる今日このごろである。

ここ二年間の学生生活は、みごとに自由であり、人間の生きる場があつた。幼稚園にはほとんど毎日入りびたり、幼児教育を肌で感じとつていった。皆が貪欲だつ

た。授業はサボつても幼稚園には出かけ、先生方の一挙手一投足を盗みとろうとしたのである。仲間が集まり、保育の話題が出る。○○先生はこうなさつた、△△先生はこう、次々と例が出される。それをまた、幼児の場面で確認していく、自分なりに作りあげていく。そんなことの繰り返しだった。毎日保育室の掃除に出かける。授業を終えてこの仕事は確かにイヤな時もあつたが、そこで得ることはたくさんあつた。た

だぎれいに美しくすれば良いのではなかつた。この部屋は幼児が生活し、活動する場であることを教えられた。ただの応接間ではないのである。昨日、今日、明日と続いている今日の掃除なのだ。時間から切り離し、幼児から切り離しては、いくら美しく飾つても死んだものとなつてしまふのだ。

### 私の体験した幼児教育

#### 就職したてのころ

誰にでも、何をしても、必ず“初め”がなつてふき掃除をしたそうである。私のところは棒雑巾に変わつていて、便利になると

いうことは、どうも心までが省略されい、くような気がしてならない。

はずかしい話であるが、学生生活の記憶、学んだことはこの位しか憶えていないのである。他の保育技術のこと、実習（研究保育等もしたのだが）も、自らの力の無さを反省するのみで終つてしまつたらしい。このことは実際に就職してみて、こんなはずではなかつた、という形ですべて新しい体験として、目の前に立ちふさがることとなる。

点に於て、初めて故の悲哀に満ちるのである。

私は、幸いにも、両親の営む幼稚園で初めての幼稚教育者としての出発をする。児童教育者等と大それたことを書く資格はないし、おこがましいことではあるが、「幼稚園の先生」というのもちょっと恥ずかしい。

例のごとく入園式の前は、雑事を消化するのに忙しい。時間を作つては、新入園児の名前を憶えようと努力をする。しかしそれは徒労に終わる。何故って、生きている子どもと実際に向き合つたその時、はじめてその名前が生きたものとなるのだから。

入園式、その時から、幼児、父兄（特に母親、私（教師）との歩みが始まる。が、新前の私にとって、それは戦いでしかない。故に、その余裕の無さは悲しい限りである。振り返つてみると、滑稽な、まことに恥ずかしいことなのである。例えば、父

兄に対しどう偉そうに見せるかというこ

と、親に負けてはなるまい、年齢的にはも

ちろん、社会的経験も豊富である。この歳

ますよ。一番難しいことなのですから」と

言われたことを思い出す。今から思うとよ

くも「遊ぶことができる」と言えたもの

あるかも知れないけれど、私の学んだ幼児

経験は大きい。もしかしたら机上のもので

あるかもしれないけれど、私の学んだ幼児

教育を、それに流されてはいけないと、幼

児との触れ合いの中から、一つ一つ体験し

てみたい、それ故の戦いであった。その戦

いが無意味なものとなつていくのである

が。——というのは、幼児と教師のみで手

をつないでいても成長しないのである。そ

のつながりが親を含め、円となつていかな

い限り。

幼稚園の生活は、一方的に押しつけられ

るものではないらしい。それを基本に毎日

を送ることとした。故に、遊ぶことに全力

を投入したが、その難しさ。学生時代、実

習にいったところの先生に、「何もできな

い」と申し上げた

からだ。一人ではない、集団が相手なのだ。そ

の集団も画一のものではない。乱暴あり、

メソメソあり、それぞれが一日を楽しく過

ごさねばならない。肩の荷が重い。こちら

は一つも楽しくない。遊んであげる、樂し

くしてあげるという、一方向へのみ、氣持

ちが向いているからだらう。この関係で良

い保育が生まれるはずがない。分かつては

いても、がんじがらめになつていく自分を

悲しまだけである。そして、そこから脱け

出ようと、まつたく体当たりの保育が何年

かづづく。

何年か経つたある日、頑張った保育が定

着しはじめたころ、学校時代の友人に子ど

もが生まれる。その友人はもちろん幼稚教

育とは関係のない大学に進み、また元来母

性的な方ではない人間である。ところが、自分の子どもにかける言葉かけ、あやしむすかつた時の処理の仕方、母親なのである。あの何もわからない子子どもに言葉が通じていくのである。私は目の覚める思

いがする。いったい今までの私と幼児との関係は何だったのかと……。初めての親から離れた幼稚園生活を、もっと母親的付き合いからはじめることにより、教師でしかなかつた私と幼児の関係が、もっと近づいてくるのではないだろうか。

洋服が汚れたら洗つてあげる。コートのボタンをはめてあげる。できないことがあつたら助けてあげる。お弁当の仕度、後片付けを手伝つてあげる。できてしまえば何でもないことであるけれど、それによつて幼児と教師との関係ができ上がっていく。洋服は汚れているよりきれいな方が良い。しかし、きれいにただすれば良いのではない。そこに母親とのような関係が生まれれる

ことの方が大切なではないだろうか。当然できる年齢があつたり、できる幼児がある。が、ちょっと手をかけてあげると、にこっと見上げるあの笑顔が何ともうれしい。

そんな幼児との触れ合いを楽しみながら、いわゆる、六領域と呼ばれる保育内容にも、何かはつきりつかめない疑問にとりつかれる。歌をおしゃる、絵をかかせる、製作する、ひとしきり遊んだあと、何かしてみようかと前もつて用意したものを見せてみようとする。だが幼児の遊びを見てみると、四月入園時から一学期中は、やつと園の生活に慣れつたところ。もちろん個人差はある。そのまつたく一つの方法で活動を押しつけられるだろうか。やつと楽しくなった幼稚園での遊びの中で、遊びをより充実させ得ないだろうか。こちら側から与える一つの活動をするよりも、個々に

充実させていくことの方が大切なのはあるまい。しかしそのゆとりのあるのは、二学期半ば頃までで、運動会、学期末、学年末、進級、進学となると、あせつてくる。そこで平凡な教師になり下がり、頑張つてみるのである。ふと我に返つた時は、そこには何も育つてないことをさびしく感じながら……。

#### 障害児と共に

就職して三年目、偶然に、ということは、全く普通の幼児と同じグループの中から自閉的傾向を持つ幼児と出会つた。入園当初は他の幼児も泣く者が往々にしてある。その中の一人にすぎなかつたのであるが、日を増すごとに離れた存在となつた。こちらがやつとそれに気づき、何か異質のものを持っていていることを知つてから、その幼児と、教師、他のクラスの幼児との関係に、スムーズさが生まれてきた。これ等障害児との出会いは、前に本誌に載

せて頂いたことがあるので省略させて頂く。

この出会いで私自身一番学んだことは、障害を持つことそれ自体を打ち消すことはできないということ。もちろん、それをより軽度にすることと、それを目的に教育治療することも必要であるが、それよりも、それぞれを背負って生きていること、そのことを認めること、つまりそれを個性として認めるということ、その上で保育が成り立つのではないかということ。これは、一般に行なわれる保育にもいえることだと思います。それは、その幼児を格付けることでは決してないということを一言付け加えておく。

今の保育  
十年も同じ仕事を続けていると、子どもは常に新鮮であるのにもかかわらず、私自身もその出会いに新鮮であらうと努力する

のにもかかわらず、自然とあるパターンの上に生活し、より無駄のない生活をしようとしている。ふと我に返ると、反省させられることがある。今までの出会いでの失敗、

こうすれば良かったということなど、その時の児童の姿をはっきり見ずして、ペター

ンにはめようとする。幼稚園といふところは、確かに自由でなくてはならない。けれど同時に集団もある。集団に於ては他人に迷惑をかけることは最小限にしなくてはいけないというのが私の心情である。故になるべくそういう機会を少なくすること、特に入園当初はさける努力をするが、皆でお話を聞く時、お帰りの時など、どうしても静かにしてほしい時がある。(もちろん、この時も例外はあげきれないほどあるのだが) 片付けもその一つである。他児が片付けている時に遊んでいるのは許されない。

この状況、その児童の状態等により画

一にはなかなかいものであるので…しかし基本的には、そのような集団であることによりルールが生まれ、それに自然に従うことになる。

幼児教育には経験などというものが通用するものとは思っていないが、ふと顧みると、いかに慣れによつて言葉たぐみに、それ等のルールの上に児童をひき廻していたかに気づく。もっと自由でなければならなかつた児童の生活を、こんな形で一向に引っ張つてしまつてはいるのではない。かと云つて、まったく無秩序に、まるで動物園のごとき幼稚園の生活にも疑いを持つ。児童とぶつかり合うことにより、教師の試行錯誤がはじまる。これ

登園してくる幼児を迎えるため、少し早

۹۰

A 「いまお玄関つくっているところ。ち  
ょっと待つて」

A 「いまお玄関

一人Bは半べそをかいている。すぐに「どうしてB「なーんだ、ここがお玄関かとおもつやうしたの」と声が出る。母親から「Aちゃんやつた」

やつた B 「な

んの靴箱のふたが、頭にあたつたんです」

つみ木を持ち出して何やらどんどんでも

こちらは、どうしても母親がいると言葉がでてこない。「Bちゃん強いからもう大丈

B 「ここのがいところは僕たちの入る  
ていく。

夫よね」もちろんBはすつきりしない顔、

といふ。ネエー。これは先生の入るといふ  
二ノヒラが

に見、母親に入つ当たりをしている。Aは

「そうしようか、ネエー、先生入つて

お手洗いへ、続いてBも。しばらくすると二人笑顔で廊下から部屋に入ってくる。私は

くれる？」

の関知するところではなかつたらしい。い

済んだら入れて いただくわ』

つものように、何やら楽しそうに話をしながら、部屋であそぶ。彼等の遊びは、もう

この御用とは、決して今しなくてはならないものではない。すぐに入れてもらうだ

そこから始まつていたのである。

ができつつある。 様子を並へかえ 何やら家のようなもの

ことは悲しいこと  
なんにも――反省の場  
面を見る。

B 「えー、ここがおへりぬでもいい

そこへ外で遊んでいたC子がやつてく

くる。急に外で遊んでいたる幼稚が気になつて、外へ出てみる。三月と言えども日陰の寒さは身にしみる。その寒いスペリ台に、お家を設定し、何やらやつている。

E子「いらっしゃいませ。お茶をこちらしますから、どうぞ」

私「どうもありがとうございます」

とは言つたものの、こんな寒い所に長くいられるものではない。

私「また参りますので失礼致します」

E子「もうすぐ。いま下子ちゃんが作っていますから」

枯草をこまかくしてお茶わんに入れている。

私「この次ごちそうになりますね」と適当なことを言つて、早々にその場は退散。部屋に戻ると、C子が待ちうけて居り、「レコードかけて」。ここ何週間かつづいている「七匹の子やぎ」の音楽劇である。

これは、かけ始めると切りなくかけさせられるので、こちらも今回はうわ手に出る。「一回だけね」これは、このクラスのほとんどの幼児が好むもので、レコードがなると、その持ち役持ち役（これは自然にでき上がってしまって居り、お母さん役、子やぎ役はたまにダブルキャストになることはあるが、他はあまり変動がない。オオカミ役は常に私で、誰もこればかりはなり手がない。しかしこのオオカミ役も幼稚園だけのことらしく、家へ帰ると、家の者をやぎに仕立て、自分がオオカミになつて、私とそつくり同じことをするのだそうだ）で登場してくる。最後の水におぼれたオオカミを助けるのがうれしいらしく、おぼれ前に助けてくれたりすることもある。最後に楽しく皆でおどつてこのげきも終る。

もうお弁当の時間である。片付けなくてはならない。部屋中、○○こつこの家と、七匹の子やぎの舞台になつてしまつているのだから、また教師の悪知恵を働かせる。ボツボツ片付けている幼児の手を止めさせ、「ヨーイ・ドン」と言つたら片付けるのよ。どなたが一等賞かしらね」一呼吸置いてから「ヨーイ・ドン」早いこと早いこと、見る見るうちに片付く。もちろんこちらも負けてはならない。私たつて一等賞になりたいのだから。外からも荷物が片付けられ、運ばれてくる。一応全部片付いたわけだ。「いただきます」の挨拶をすませるまで十分余りだ。おどろいたものだ。でも余りこの手はつかいたくない。何故って？おわかりいただけるでしょう、この気持ちを……。おばさんが、私のお茶を運んできてくれる。「早いこと、今片付けていると

（一九七七・三・七 三歳児十六名）  
弁当を自分でつつんで片付ける。それでも早く遊びにいきたい時など、「先生、つつんで」「先生、入れて」と言つてくる。体操をし、一日が終る。皆で園庭を行進する。ふとみると、何とだらだら歩いていることが。その時、私自身の歩き方反省する、もっと楽しく歩きましょうと。

